

てしまう…勉強になりましたね?』

自分の口角がどんどん上がっていくのが分かる。この充足感、身体に満ちる熱情こそ今の私が求めてやまないものだった。

この喜びをもっと、もっと…!!!!!

「ふアアアアアアーーーーー!!!!!!」

自分のクリトリスをねぶった瞬間、私はおとがいを反らし、ベッドの上に崩れ落ちた。

衣類はすべて脱ぎ捨てて、ブルーシートを敷いているものの、汗や愛液で塗れた空間は私自身のメスの香りで埋め尽くされている。

——先日、錠前サオリに勝負を挑んだのは、あの部長が苦しめられたという相手に単純に興味を持ったからだった。

その中で私は戦いでは敗れたものの、媚薬をつめた手りゅう弾で自爆をすることでセックスに持ち込み、なんとか彼女に勝利することができた。

その余韻が、忘れられない。

こうして何度もひとり自分を慰める夜を過ごし、それでもあの交わりが忘れられない。

「……………こうも、焦がれるという経験も少ないですね」

私…いや、室笠アカネにはひとつ、大きな悩みがあった。

他人に求められた能力を発揮することはできる。爆弾を用いて対象を『お掃除』をすることは好きで、メイドとして主人に奉仕することも好きだ。そうした行いをしていると胸が躍り、自然と笑みがこぼれてくる。

しかし『自分が好きなものを理解している』ことと、『自分が何者かを理解している』ことは大きく異なる。チームの中でも器用な立ち回りを求められる自分だからこそ、様々な役割を演じる自分というものに、空虚さを感じる部分があった。

「あの高揚感が、私の中に火をつけて導いてくれるかもしれない…」

気が付けば、私は受話器を手を取っていた。

錠前サオリの日常は逃亡者としての生活である。

キヴォトスでも有数のテロ事件を起こし、様々な警察組織から逃れ拠点を転々とする…すると日々の糧のため受けられる仕事もイリーガルなものに偏りがちだった。

だから見覚えのない電話番号から着信があるのはいつものことなのだが、今回の電話番号はかつてブリーフィングで見た資料にある電話番号だった。

彼女は数秒ほど鳴動するスマホの画面を眺めてから、通話ボタンに手をかけた。

「……………C & C か？」

「あら、私たちの部室の番号ご存知だったんですね。部長がお伝えを？」

「いや…私がかつて襲撃目標などの資料をもらったときにこの番号も掲載されていたのですね」
「それを覚えていらしたのですね…さすがです」

心にもないことを、とサオリは内心苦笑してしまう。しかし、こちらの電話番号を割り出してきたのはさすがだが、一体何をさせようというのか。

「それで…世間話をしにきたわけではないだろう？」

「あらそうですね、こういうのは手短なほうが良いですね。実は…」

そう話した五日後、錠前サオリは室笠アカネと金網で覆われたオクタゴンのリングで向き合っていた。

下半身を隠さず、上半身のみを隠した水着姿でリングに立つふたりの股間には、ふつうの女性には存在しないもの、薬によって一時的に生やされたペニスが存在している。

サオリのそれもかなりの大きさだが、アカネのペニスは乳房の大きさに比例するようにさらに巨大で、観客席から見ても存在感を放っていた。

『サオリー！今日もお前に賭けてるんだからなー！』

『おいメガネ！そのおっぱいでつぶしちまえっ！！！！』

『いやー、対峙するふたりの性闘士を前に、会場のボルテージは最高潮です！こんにちは、今

日も実況の川流シノンです。そして解説はいつもおなじみ！』

『はいこんにちは、仲正イチカっすー。いやー、あれ、入るんですかね？』

『え、あ、あー：アカネさんのアレですか？あははっ、ちょっと壊れちゃいそうですよね、あの大きさは』

『ネルさんほどじゃないにしても、かなりの大きさ。大きいバストに大きいペニス、サオリさんからしたらかなり厳しい相手かもしれないっすねえ』

『それに、試合前にサオリさんが申告したところによると、以前アカネさんと普通にセックスをした際には主導権を奪われて敗れたそうです』

『それも意外な情報っすよね。でもサオリさんって人対策の鬼なんで：どうなることやらって感じっす』

『ですね。さあ、オッズも確定したところであとはゴングが鳴るのを待つのみ、会場のボルテージも最高潮です！

いき残るのは果たして室笠アカネか!? 錠前サオリか!?』

ワァアア：と歓声が響く性技実現委員会のリングの中、悠然と微笑むアカネとそれを見つめ返すサオリだけが沈黙を守っている。

だが、サオリには聞かねばならないことがあった。

「どうしてだ？」

「はい？」

「どうしてこのような場所に姿をさらす気になった？勝敗はさておき、自分の痴態をさらす結果は変わらない。こんなところに立つのは大きなリスクがあるはずだ」

「そうですね…それでも、得たいものがあつたから、でしょうか」

C & Cに所属しているということは少なくとも他の生徒よりは多くの権限や金銭を自由にできる立場のはずだ。しかもかつて読んだ資料の中では組織の中でまともに実務ができるのがアカネだけだと記されていた。その権限を持ちながら、どうして。

「理解できないな」

「フフツ、私自身予想していませんでしたよ。ただサオリさん、あなたと肌を重ねたあの日に感じた充足感、今一度味わってみたくなったのです」

「そうか…やはり、理解できないな。だがこちらも仕事だ、ファイトマネーだけで十分というわけにはいかない。前回のよう to 愉悅を貪れると思わんことだ」

「それはそれは…では、確かめてみましょうか」

ゴングが鳴ると、アカネはゆっくりと近づいてきた。その意図を察したサオリは彼女を抱き寄せると、互いの乳房を水着越しにつぶし合いながらくちづけを交わす。

「んっ、ちゅ、れろ…んんん…むっ、く、んんっ…んう…」

「あむう、れろお…んじゅっんじゅっ、じゅるるるう…」

サオリの舌が突き入れられると、アカネは口を開いてそれを受け入れ、迎え撃つ。呼吸を奪うように蠢くそれにむしろ絡まり、逃げられないように密着した。

—まずい。

そう判断して逃れようとしたサオリだが、アカネは脚を絡めてそれを妨げる。アカネが前傾姿勢になると、巨大な乳房とペニスでサオリを圧倒し、ぐいぐいと押し込みながらわずかに官能を高めてゆく。

ペニスはさておき乳房の大きさの差は、密着すると大きな武器となることをサオリは否応なしに思い知らされている。左右への動きを制限され、相手の裏に回り込んだりとそういったテ

クニカルな行動に大きな負担がかかってしまう。

「どうですか。前回のことを思い出すでしょう？」

「物覚えは…悪い、ものでな…くうっ」

「そうですか、では嫌でも思い出していただきますよ」

耳元でささやくアカネに対して身をよじって抜けようとするが、徐々にリング際へと押し込まれてゆく。パワーでは勝っているはずだが、この場では官能が勝る。

アカネはサオリの首筋に舌をはわしてその股間に手を伸ばすと、サオリのペニスを握りしめる。突然の感覚に思わずサオリが身をすくめると、眼鏡越しの上目遣いでアカネの瞳がゆっくりと細められた。

「いえ思い出すだけでは足りませんね。それ以上のものを、ご奉仕いたしましょう？」

「な、なに…」

「私、メイドとして様々な奉仕の術も学んでおります。その中には男性を喜ばせ、箠絡する手段も多くあるですよ。そちらでもこのようなものを学ぶ機会があったかもしれません…ですが、私の方が上です」

「く、ぐう、ううううう…」

休むことなく与えられた快感にリング際で崩れ落ちるサオリの乳房の上にのしかかると、反撃をさせないシックスナインの形をとり、怒張するサオリのペニスに手をかけた。

「さあ、無様に射精してください。お客様たちもそれを望んでいるはずです」

「ううううう、この程度…で…!」

「果たして強がりがいいつまで続くやら…ほら、こうやって亀頭の部分を指でつまんでクリクリと撫でまわしてあげるだけでも…」

「あ、く、な、ぜ…!?!」

「ペニスとは本来非常に敏感なものです。私たちの膣と同じく、ですね。ここの試合をいくつか拝見しましたが…皆さんペニスを強引に扱いすぎです。そんなことをしなくても射精へと導くことは簡単にできるのですよ。このように…」

「おおああアアアア!?!」

ただソフトタッチで愛撫しているだけなのに、しびれるような快感が背筋を走る。身体をよじろうにも、アカネの乳房に邪魔をされて動けない。サオリはまるで糸の切れた操り人形のよ

うにリングに倒れたまま、なすがままだ。

「では一回目、伊っていただきましょうか」

「そ、そんな……!!」

アカネの指が絡みつき、ペニスが包まれると同時に柔らかく撫でまわしてくる刺激がサオリを襲う。先走り汁を潤滑油にして温かい官能がサオリのそれを包み込むと、強烈な快楽と共に大量のザーメンが放出された。

―想定はしていたが、これほどまでの妙技を備えていたのか……！

これまで培ってきた全ての技巧が通用しない。どんな女が相手でも確実に追い詰めてきた技はすべて封殺され、自らの弱点であるペニスを弄ばれ続ける。

大粒の汗を流して喘ぐサオリの吐息を乳房で感じたアカネは、再び精液に濡れたサオリのペニスを優しく扱っていく。

「まだまだですよ？これからもっと気持ちよく、淫らに墮として差し上げます。お覚悟ください」

いね」

「ふ、ざけるな……!」

ここで終わってなるものか、と歯を食いしばったサオリが体を起こそうとするが、快楽から身体に力が入らない。その様子を見てアカネは口の端をゆがめた。

「その意志に敬意を表して、こちらを使って差しあげますね。フフ、これは初めてなんじゃないですか？」

アカネは体勢を入れ替え、水着を脱ぎ捨てると、自分の双丘でサオリのペニスを挟み込む。この爆乳で行うパイズリだ。危機にあるというのに、サオリは思わず生唾を飲み込んだ。

「おや期待しておいでですか？ご安心を…この室笠アカネ、しっかりとご奉仕させていただきます」

「くう、ああア!!」

（―これほどとは想像以上だ。肉厚な乳房の圧迫感が、こうも、こうも……!）

ペニスがまるごと埋没してしまうほどの大きさ。それでいて柔らかな触感がサオリを圧倒し、一瞬にして翻弄される。

「う、うああ、おう、ぐおおオオ!？」

「いかがですか、私の胸は。これもまたメイドの嗜みの一つです。あなたにお捧げしているのですよ。存分に受け取ってくださいね」

片腕で両方の乳房を持ち上げるようにしながらサオリのペニスを執拗に責め立てている。それでも一方の手ではペニスの根本を抑えることでバイズリから逃げることでできないようにしているのだ。

まさに計算し尽くされたバイズリを前に、サオリの抵抗する心も徐々に崩壊してゆく。

『ハハッ、サオリのやつ何もできていないぞ!』

『なんだか、哀れになりますね……』

観客が好き勝手なことを言っているのが聞こえるが、今はそんなことに意識を割く余裕など

ない。アカネのパイズリを止めなければと脳内で思考がぐるぐる回るが、焦るばかりで何も浮かばなかった。

そんな状態のサオリに対して容赦のない快楽を与え続けるアカネ。サオリは何度も射精してしまいそうな快感を与えられ辛うじてこらえているが、アカネの勢いは全く衰えない。むしろ激しさを増していると言っているだろう。

「どうですかサオリさん。メイドによるご奉仕、お気に召していただけましたか？」

「この……くうウ!!」

「おや、これでは満足いただけませんか？ではこれはいかがでしょう…」

「や、あ…んああああああアアアーーーーーッ!!!!!!」

サオリは口を閉じて必死に耐えようとするが、それでも我慢することができずに精液を放つ。それでもなお耐えようとするが、さらに搾り取られる結果になるだけだ。

「だ、ダメだ…また、ふぐううううううーーーーーッ!!」

二度、三度と立て続けに射精して体力的には追い込まれているはずだが、まだサオリのペニ



スは勃起したまま。

（―ああ……本当にあなたは犯し甲斐がありますね……）

サオリの痴態を間近で見続けて、乳房をこね回し続けたアカネの膣口は、まるで別の生き物であるかのようにヒクつき始めていた。

こんなものを見せつけられて発情しない方がおかしいと言えるかもしれない。しかし、だからこそ自分から受け入れてしまう訳にはいかないのだ。

奉仕をする以上、相手から望まれるように誘導するのが理想形。どうせ勝利するのであれば美しく勝ちたい、そういう欲求がアカネの中に芽生えていた。

（早く堕としてしまえよう…）

「ほら、まだまだいきますよ。ご満足いただけるまでずっと…ひぎいいいいいい!!」

突如今までずっとサオリのペニスを包んでいた乳房に電撃のような快感が走り、アカネは思わず身をすくませてしまう。

「お前も乳首の先端はズいぶんと弱いようだな…！」

「あつ、く、そん…な!？」

乳首をつままれて思わず身を逸らした瞬間、サオリの両脚で胴体を挟まれ、寝技の要領で身体を仰向けにされる。

そのままアカネは自分がしていたように抑え込まれてしまう。

「メイドの奉仕術…確かに堪能させてもらった。礼と言ってはなんだが、アリウス式の性交渉術も味わってもらおうか」

サオリが水着を外し、天井へと放り投げて脱ぎ捨てると、場内から黄色い歓声が上がる。さすがにこのような演出術はサオリに分があった。体力的には追い詰められていたはずだが、これだけでだいぶ思考が落ち着く。

「お前のほどではないが、私の乳房もなかなかのものだろう？これでパイズリをされたら…室笠アカネ、お前のペニスはどうなってしまうのだろうか」

「くっ、私はそんなもので……ぐうう!？」

自分についた精液を乳房に塗りたくりアカネのペニスを捕らえると、サオリはすぐさま前後運動を始めた。

その動きは実に巧みなものの、アカネは表情を歪めることはあっても達することはない。ギリギリで耐えながら、強がる。

「な、なるほど…これは確かに素晴らしい…で、ですが…まだ、私を絶頂を導くには未熟…!」

「そうか。ではお前がやったようにこうして圧力を増したら…どうだ？」

「……んひひひひひひ!!!!!!!!!!」

「やせ我慢だったようだな。ほら、続けていくぞ」

「そ、そんな…やめ、今続けられたら!？」

思わず射精してしまったアカネの抗議に構うことなく、サオリの乳房の間からアカネの精液が流れ出していく。大きく乳房をグラインドさせてバイズリを繰り返すと、その度にアカネの



身体がびくんと跳ね上がった。

続けざまに何度もイカされているのにサオリの追撃は一向に収まらず、アカネは激しく首を振って悶えた。

「だめええ!!もう出ないです……あ、あっ!これ以上はほんとうにダメエエエエ
エ!!!!!!」

「ならば降参するか?私のほうが上だと許しを請うか」

「い、いや……それだけは……!!ああアア!」

サオリはアカネに体重を預けて押さえつけつつパイズリを再開させる。パイズリによる快楽に耐えかねてアカネが身をよじるたびに柔らかそうな太ももがぶるんと震え、さらにヴァギナから流れる愛液の量が増えていく。

(――このままでは負けてしまう。イかしつくされてしまう)

そんな弱気がアカネの脳裏をよぎる。

（でも、まだここで負けるわけにはいかない。もっともっとこの時間を…！）

だがそのネガティブな感情よりも、胸を支配する高揚感が勝った。彼女はなんとか気を取り直すと、

「さ、さすがですサオリさん…しかし…！！！！」

「むうううう!!」

アカネの気迫に答えてその太ももがサオリの両脚に絡みつく。ぎゅっとサオリの胴体を抑え込んでそのままアカネの上まで持ち上げられた。今まで射精を繰り返していたアカネのペニスと、サオリのペニス。そしてアカネとサオリの乳房同士が再びぶつかる。

「ここで…！！」

「させる、か…！！」

リング上でマウントポジションを取り返そうとしたアカネとそれを防ごうとしたサオリの意図が重なり、膝立ちでぶつかり合う。